

# 国語教師の群像

倉 沢 栄 吉

## 1. はじめに

国語教師論はいつも国語教育論の終末に位置づけられる。すべての教科教師がそうであるように、国語教師が教師でなければならぬ重さに基づく（西尾実の提言 — 国語の教育こそ教育である —）。とりわけ国語科という教科は、言語を媒介とし内容として行われる。国語で国語を教える。宿命的に人と人が（言葉を仲立ちとして）ぶつかり合わなければならない。だから、国語教育を語るとき、何としても教える人間を語らなければならない。

国語教師論を問題にするとき、人々は、すぐ先達の実像を思い浮かべるべあろう。芦田恵之助とか峰地光重、近くは大村はまというふうに。また教師論の先覚者として、澤柳政太郎、西尾実（この方々と並べるのは異和感があるが）、水木梢等々を。

これら実在の人物から迫っていくのを上からの方法と呼ぼう。これに対して、下からの方法がある。国語教師は無数に存在している。今も、どこかの教室で国語教室を作り営んでいる人たち。こういう人々の中に「国語教師」があるとすれば、それらを集約して、国語教師のあり方とあるべき姿とを見きわめて行こうとする方法が有効であり必要である。

このような方法をとっていくうち、さまざまな形の教師が帰納されてくる。それらを漢語で雑然と並べると、示範者・先導者・知識人・評価者・共鳴共感者・助言者・伴走者・声援者……などがあり、それぞれ激励や指示、批判、誘導などの機能を果たす。ある人がコーチの技に秀で、他の人は自然の徳化に俟とうとする。甘い精神で生徒によりかかろうとする人がある一方、冷やかにつき放して彼らを見ようとする者もある。熱中先生はマスコミにのりやすいが、一方、広い視野に立つ醒めた人は人気に乏しい。

どういうタイプがどういう生徒とその生徒を包む状況に適合するかは、一般化することのできない複雑な問題である。しかし、最近の動向として、教師専門職論が台頭しているように、私には思われる。本稿ではこれに焦点をあてて、二、三の考察をしようとするものである。

## 2. 宮田光雄と大村はま

岩波ブックレット No.14に、宮田光雄は「若き教師たちへ — 希望としての教育 —」を書いた。この人の訴えたいところは、その序に書いてあるように「……彼が教師であることに安住せず、生徒たちと悩みをともにしながら人間として真実に生きる途を問いつづける……」人を求めて、教育の未来に託そうとするところにある。だから、この本は教師論なのである。

大村はまはこの著者とは個人的な交渉はない。ところが、宮田は大村の『教えるということ』を愛読した。彼は次のように述べている。

彼女によれば、たえず自ら学ぶものこそ《先生》たることの資格だという。そうした教師は、

勉強の苦しみと喜びのただ中に生きる子どもたちと同じ世界にいる (p.45~46)。

上記の引用部分だけで、大村はまの教師観をよく押さえている。「国語教育の実践を通して、この《専門家》として教えるということを強調してきた」と宮田は紹介しているが、これもその通りである。大事なことは「専門職としての教師」ということである。教師を聖職者か労働者かと問うレベルからは、真の教師論は起ってこないだろう。宮田が指摘しているように、子どもと共に苦しみ喜び伸びてゆく人間が、教師の本質である。とすれば、それは芦田恵之助の「共に育ちましょう」にあたる。また、シュタイナーの思想にも通うのである。(……こういう授業を毎日やれば、先生自身、自分を内的に変えていくことができると思いませんか。シュタイナーは、「自己変革を先生が起さなければ授業はできない」といっています。一回一回の授業を通じて、先生自身が育っていきます。毎日がたいへんな授業の連続であるかもしれません。でも、それは文字通り生産的な仕事です。きっと、一日の始まりには予定していなかったようなことが、その日の終わりには生じているはずです。そういう現場での教師の全人的なありかたを「人生の芸術家」だといいます。) — 子安美知子『シュタイナー教育を考える』1983年3月 常陽書房 p.112 —

芦田の実践とシュタイナーの考えとを結び合わせたところに、真の教師像が浮かぶ。それは、宮田のいう、大村はま的实践家の中に見られる、自ら学ぶことによって自己変革をとげてゆく人間、ということになる。

こういう考え方は、従来の国語教師論には、まれにしか見ることができなかった。(野地潤家の「国語教師の条件」—『国語の教育』1971年4月号 国語教師の生き方と専門性特集号—) 最近それが表に出て、真の教育者を求める声になってきたのは、残念ながら問からの声ではない。教育という仕事に専門に打ち込んでいる人ではない、たとえば演劇人の中から、我々に啓示されたものようである。

すなわち、山田洋次。その『寅さんの教育論』に描かれた渥美清は、生徒として「ともに学ぶ」あり方を示している。彼がそこにいることによって、いかに学友が充実した学習を営むことができたか、はかり知ることが出来る(角川教科書PR雑誌に載った対談「映画と私」及び昭和58年4月2日読売新聞夕刊の「寅さん惜日」を参照)。

なお、宮田光雄『きみたちと現代』(岩波ジュニア新書17)の31頁には、教師の仕事について斉藤喜博の『私の教師論』を引用して、専門家・創造者・芸術家論が紹介されている。

### 3. 西尾実の感動

私は最近思ひがけなく数多くの教室を参観する機会を得た。そのうちここには、特に教師の問題として深い感銘を與へられた二つの教室について思ひ出して見たい。

一つは尋常三年の国語で「賀茂川」の課を学習させてみた。私が見たのは或る時間の後半で、教授案によれば、全学習が四時間に配當されてゐるうちの第三時間目であつた。全文取扱が二時間ですみ、四段落中の第一第二が前時間で終つて、この時間には第三段が取扱はれることになつてゐた。前半に於て全文通讀が行はれ、第三段落の大意が考察されて、これからその「内容吟味」に入らうとしてゐる時であつた。教授案に「内容吟味」とある如く、その学習指導も全く地理教

授といってもよい程で、文は地圖によつて説明せられ、地圖は更に郷土地理によつて理解させられてゐる。續方教授からいえばたしかに本格的な方法ではない。それにもかかわらず、その教室の學習気分は不思議に生き生きしてゐる。特に私を驚かしたのは、児童等の提出する疑問が、また先生の質問に對する答解が、いかにも彼等の本音——私がかうより外にいひやうを知らない——であつたことであつた。私がそこで省て更に驚かざるを得なかつたのは、いかにわれわれが不知不識の間に、児童・生徒に、教師たるわれわれの注文するやうな疑問を起させ、われわれの要求に合ふやうな答解をさせようとしてゐるか、従つて、いかに彼等も亦教師の要求に應ずるやうな質問を試み、答解を提出するやうに傾向づけられてゐるかであつた。児童・生徒も教師も人間としての肚をわつて、生地のままの眞實を率直にいひ、行はうとしてゐない。意識として作為しないまでも、少なくとも教師と児童・生徒との間に或る一定の傾向が出来てゐて、不知不識の間にそれを軌道として動いてゐる。しかるに今この教室の児童等は、いかにも本眞のままに、生地のままに動いてゐる。彼等の眼の輝きにも、言葉の響きにも、熱心というよりも、むしろ赤心があらわれてゐる。これは一体どこから來るのであらうか、それが私には問題であつた。

上記が「二つの教室」の中の一つ、小学校の部である。

長々と引用したのは、この文章（西尾実「国語教室の見学」—『国語教室』昭和9年4月号、文学社—）が、全集の著作目録にも記載されておらず、一般の目にふれにくいからである。

さて、西尾実の問題としたところは、やがて氷解した。

ところが間もなく放課の時鐘が鳴り、その時間の學習が結末になつた。ふと教壇上の先生を見ると、喪心した人のやうにがっかりしてゐる。為すべきことを為し盡し、力の限りを出きつた人の姿である。が、それはほんの一瞬間であつた。次の瞬間には、先生は机上を整理して姿勢を正した児童等と毅然として相對し、真心のこもつた挨拶を交して放課にした。私には、ここにさきの疑問を解くべき鍵が見出されたやうに思はれた。あの教室に流れてゐた學者の眞劍さは、教授者のこの熱誠の反映に外ならなかつたのだ。しかもそれは教授者の主觀として、氣分としての熱誠ではなく、恐らく教授者自身にも意識されてゐない渾身の熱誠であり、仕事の上に具現された。事實としての熱誠である。この熱誠が、讀方の學習指導としてはむしろ適切でなかつた教授の様式を超克し、人をして低頭せしめる教室たらしめたのであらう。又この没我の熱誠が、不知不識の間に生じ易い、教師の要求に基づく學習の傾向や型を揆無して、教師と児童とを本眞の姿に於て相對せしめ、その應答をして言々赤心の吐露たらしめたのであらう。

右記の没我の熱誠、赤心の吐露を西尾が高く評価したのは、当時油ののり切っていた国語教育研究者西尾実にとって、一つのショックであつたためでもある。この文章のあとで、西尾は次のようにも述べている。

われわれは、教壇の上に年を重ねると共に、とかく教授方法の完成にのみ集中しやすくなる。したがって、工夫の対象となるものが多くは完成の爲の条件である。（略）そういう完成的な努力にのみ没頭すればその努力が奏功すればする程、国語教室は力と生命を失っていくほかはないであらう。

完成を目ざす教師は、結果主義者であり、テストを愛する。西尾が警告したのは、「完成のた

めの完成に安んずることなく、常にこの根柢を啓沃し、振興しなくてはならぬ」という考えであるが、この根柢に求められたものは「熱誠」と「一体感」とである。

第2の国語教室で感銘した一体感の授業 — 中学二年の漢文の授業 — については、この中で紹介することを省いたが、西尾実は二人の未完成の授業者を「稀に見る勝れた授業」と激賞している。この未完成・プロセス中心の思想は、シュタイナー学義に於いても見ることができる。この意味で、専門職 — ともに学ぶ — 過程を大切にする、の三者は一つの文脈を形成するといえよう。

現代が要求する国語教師は、さまざまな群像として、寛大にとらえられなければならないが<sup>註)</sup>それらをつらぬく底流に、上記に述べたような“専門性”が存在していなければならない。

註 国分一太郎文集『そのときどきの教師論』の「明日の教師像」「現代の教師を信じたい」などをも参考にして。